
幸運少女と不運忍者

霜月白羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸運少女と不運忍者

【Nコード】

N4592BA

【作者名】

霜月白羽

【あらすじ】

高校三年生で弓道部部長の貴羽悠里は、幸運体質。だがある日、車にはねられて戦国時代の信州上田城へトリップしてしまう。

そこで悠里を世話（監視）するのは猿飛佐助だが、なんと佐助は不運体質の持ち主だった。

さらに後に語り継がれる“真田十勇士”の異様な正体を告げられ、悠里は否応なしに巻き込まれていく。

第一話「弓道部部長の少女」（前書き）

- ・この作品はフィクションです。実在する人物、出来事、団体、地域などとは切り離してお読みください。
- ・この作品は一次創作です。
- ・誹謗中傷はおやめください。

第一話「弓道部部長の少女」

六月上旬、長野県のとある高校の弓道場で貴羽悠里は弓を構えていた。茶色の長髪を後頭部上で結び、二十八メートル先にある直径三十六センチの的を、茶色の目を細めて見据える。

弓を引き絞り——矢を放つ。

ビュン、という空気を切る音が道場内に響いたかと思うと、カッ！ という音と共に、矢が的のど真ん中に突き刺さっていた。

矢を放った姿勢と的を見据える焦点だけをそのままに、悠里は深い息を吐き出した。

「すごい！　すごいよ悠里、三発中三発連続して当たってる！」

そう言って駆け寄って来たのは、同級生で親友であり、弓道部のマネージャーを務める梓だ。

梓は女子にしては小柄で、悠里の目の高さに梓の頭がある。傷一つ無いセミロングの黒髪が、目の前で揺れていた。梓は髪と同じ黒目をキラキラと輝かせると、興奮した様子でぐいっと詰め寄ってくる。

「今年の試合、悠里が絶対に優勝するね！　優勝して退部かあ、良い終わりになるね！」

「あはは、気が早いよ。他校も出るんだから」

悠里はそういつつ梓の頭を撫でる。

「へえ、部長さんは随分と謙遜が得意なのね？　それともそれが実力じゃなくて幸運のせいだからって分かってるからかしら？」

背後から棘のある声がかけられた。梓が表情を歪めるのを見て、悠里は溜息を吐いて振り返る。

其処には部活の弓道衣——白筒袖に袴は黒色のもの——ではなく、学校の紺色のセーラー服を着ている顔だちの整った女子生徒が立っていた。

髪は紺色の傷一つ無いさらりとした長髪、目は綺麗な茶色だが何

処か小馬鹿にするような色が浮かんでいる。だが、肌は女子が憧れるような白さと滑らかさだ。綺麗なものには棘がある、という言葉がピッタリと当てはまるような容姿の女子だった。

名を泰院華子たいいん はなこと言い、度々悠里に突っかかってくる同学年の生徒であり、弓道部の一員でもあった。

「泰院、弓道衣着て準備して」

悠里は嫌味に応えることなく淡々と述べた。慣れてしまえば日常というもので、今では自身の体質——並はずれた幸運——に対する嫌味もさらりと無視できるようになっている。

実際、並はずれた幸運というものは、大抵が良いものではない。何事も紙一重とはよく言ったものだ后感心する程だ。

だがそんなことは知らない泰院はピクリと形の良い眉を上げる。

「随分と余裕なのね」

「前から思ってたけど、何でそんなに私に噛みつくの？」

「だって貴方、一年生の時はあまり練習して無かったじゃない！大会まで出て、部長候補にまで挙がって……！」

ああ、成程。目をつけられたのはその時か、と悠里は今更ながら思った。

一年生の時、確かに悠里はあまり練習をしていなかった。なのに大会の数日前、大会に出る筈の華子が風邪で寝込み、急遽悠里きゆうりが指名された。しかもその大会で優勝したのだから、泰院にとっては面白くないだろう。

だが、悠里もその幸運に恐怖を覚え、幸運に実力が追いつくように必死に練習したのだ。

（……言い返す気も無いけど、堂々と遅刻してくる子に言われるのもなあ……）

そう思ったのは悠里だけでは無かったらしく、隣に居た梓が小さく溜息を吐いていた。

一方的に怒りをぶつけられることが十分以上続き、いい加減悠里が苛立つてきたのを見計らったように、部活終了のチャイムが泰院

の言葉を遮った。

「貴羽さん、車には気をつけてね？」

そう言って、泰院は道場を出て行った。

その言葉は負け惜しみか。だが何故か、悠里の耳からその言葉が離れなかった。

「大体何なのよアイツ！」

そう言って怒るのは梓だ。茜色に染まった穏やかな空の下、悠里は梓と一緒に帰路についていた。

「しかも負け惜しみか何かしらないけど、貴羽さん、車には気をつけてね？　だって！　何なのよ！」

「……梓、そんなに怒らなくても」

「怒るわよ！　怒らない悠里が可笑いなんだって。だって悠里のその幸運で得たことはほとんどないじゃない！」

確かにそうだ。

何事も紙一重とはよく言ったもので、結局要らぬ幸運が不運に繋がってしまう。

それを知って怒ってくれる梓の心はありがたい。

「梓。そのまま行くと轢かれちゃうよ？」

手前に延びるのは短い横断歩道で、歩行者用信号機は赤に光っている。梓はそれに気付いたようで、慌てて足を止めた。

（梓の方が車に気をつけてね、だよね）

泰院の言葉を心の中で繰り返した時――。

――車に気をつけてね。

そう言った時の泰院の背筋が薄ら冷える笑みを思い出した。

悠里の足が一步横断歩道に踏み出される。止まれ、と念じても、一向に足は止まらない。まるで操られているかのようだ。

「悠里！？　」

梓の焦った声を背に受けるが、止まりたくても止まらないのだ。

ブブブブブブ。

車のクラクションが耳を突く。顔を右横に向ければ、トラックが目前に迫っていた。今度は足が固まったように動かない。

ドシャッ！！

鈍い音と共に、身体に激痛がはしり、宙に身体が投げ出される。

身体が宙に舞うのも一瞬なら、地面にぶつかるのも一瞬だった。

黒いコンクリートが目前に迫る。受身をとる時間も余裕も可能性も無かった。

身体が地面に叩きつけられ、身体の中を激痛と血が沸騰しそうなほどの熱が駆け巡ったのを感じ、悠里は意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4592ba/>

幸運少女と不運忍者

2012年1月12日16時51分発行